杜子春伝

①老人は、方に二檜の陰に嘯く。
（ちょうど／で／口をすぼめて高い声を出していた。）

②遂に 与 に華山の雲台峰に登る。
（かくして／一緒／杜子春は／登った）

③入ること四十里 余 に して、一処の室屋 を 見る。
（山の中に／20km／あまり／で／軒／家屋／が／あった）

④厳潔に して 常人の居 に 非ず。
（その家屋は／厳かで清らかで／家／で／はない）

⑤彩雲 遥か向こうまで 覆ひ、鸞鶴 飛翔す。
（美しい雲／が／遥か向こうまで／鳳凰と鶴／飛翔する／が）

⑥其の上に正堂有り、中に薬炉 有り。
（家／表座敷／が／仙薬を作る炉／が／あった）

⑦高さ九尺 余、紫焔 光発し、窓戸に 灼煥す。
（は／2.7m／あまり／の／炎／が／発光し／や／を／明るく照らす）

⑧玉女九人、炉を環りて立ち、青竜白虎、分かれて前後に拠る。
（仙女／が／廻っ／と／が／いる）

⑨其の時、日は将に 暮れ ん とす。
（陽／今にも／ん／する）

⑩老人は、復た 俗衣せ ず、乃ち 黄冠絳帔の 士 なり。
（決して／俗人の服を着ず／なんとまあ／黄色の冠と赤いうちかけを身につけた／男だった）

⑪白石三丸、酒一巵を持ちて、子春に遺り、速やかに之を食らは しむ。
（い／の薬／つ／杯／持っ／渡し／食べ／させた）

⑫訖はる や、一虎皮を取り、内の西壁に鋪き、東向し て坐せ しむ。
（杜子春が食べ／終わる／と／枚の／出し／部屋／敷き／東を向い／座ら／せた）

⑬ 戒め（注意し）て 曰はく（言うことには）、「慎んで（用心して）語る（話す）こと（を）勿かれ（してはいけない）。

⑭ 尊神・悪鬼・夜叉・猛獣・地獄（が）あり（出てきて）、

夜叉……森林に住む神霊鬼神であり財宝神

及び（ならびに）君の（お前）親属（親族）の（が）困縛万苦する（縛り上げられて多くの苦しい目にあわされたと）所と為ると（しても）雖も、

皆（すべて）真実に（で）非ず（はない）。

⑮ 但だ（ただ）当に動かず（ないで）語らざる（話さない）べし（べきだ）。

当……当然～すべきだ

⑯ 宜しく（適切に）心を安んじ（落ち着かせ）て懼るること（おそれる）莫かる（無い）べくんば（ようにすれば）、

終に（その結果）苦しむ所（こと）無し（は無い）。

⑰ 当に一心に吾（私）が言ふ（言う）所（こと）を念ふ（思っている）べし（べきだ）。」と。

⑱ 言ひ（老人は言い）訖はり（終わっ）て去る（去った）。

⑲ 子春庭を視る（見る）に（と）、唯だ一の巨甕（大きなカメ）（は）（匹）の（が）、中を満たして（いっぱいに）水を貯ふる（溜めている）ある（だけだった）のみ。

⑳道士適に去り（立ち去ると）、旌旗戈甲（軍旗と矛・甲冑）、千乗（千台の兵車）万騎（一万騎の騎兵）、

偏く（広く）崖谷（深い谷）に満ち、呵叱（集結し大声で怒鳴る）の声、天地を震動す（震動した）。

・一人有り大将軍と称す（者がいた）。

・身の長丈（3m）余（あまり）、人馬皆金甲（黄金の鎧）を着け、光芒（発する光）人を射る（ようだ）。

・親衛（護衛する兵士）数百人、皆剣を抜き弓を張り、直ちに（真っ直ぐに）堂前（座敷の前）に入り、

呵して曰はく（どなって言うことには）、「汝（お前）は是（誰だ）れ何人（是……「は」）ぞ、

敢へて大将軍を避けざらんや（どうして…ないことがあろうか、いや、避けるはずだろう）。」と。

・左右（側近）の剣を竦（ひときわ高く立て）て前（進み）み、逼（迫っ）りて姓名を問（問い）ひ、

又何物（何事）を作すか（している）を問（問う）ふ（か）も、皆（全く）対（応え）へ（ない）ず。

・問（問う）ふ者大いに怒り、摧斬（斬りつけ射殺そうとして迫ってくる）争射（様である）の声（は）雷のごとき（が）も、竟（とうとう）に応（返答しなかった）へ（は）ず。

・将軍は怒りを極（極限にし）めて去（去った）る。

・俄かに(急に)して猛虎・毒竜、狻猊・獅子、蝮蝎(マムシやサソリ)を万もて計ふる(数える)ほど(現れた)あり。

・哮吼拏攫し(これらはほえてつかみ合っ)て争ひ(争って)前み(進み)、搏噬せ(杜子春の前へつかみ食おうと思い)んと欲し、

或いは(または)跳び(跳び越えて)て(杜子春)其の上を過ぐ(よぎる)。

・子春の神色(精神と顔色)動かざれ(変化しない)ば(は)、頃く(ので)有り(しばらく)て(し)散ず(退散した)。

・既に(やがて)して大雨滂澍と(ひどく降り注いで)して(が)、雷電晦暝、

火輪(火の輪)其の左右に走り、電光(稲妻)其の前後に掣り(が)、目開くを(杜子春)得(走り)ず(を)。

・須臾に(間もなく)して、庭際(庭先)の水の深さ丈(は)余(3m)、流電(走る稲妻ととどろく雷鳴)吼雷(が)あり、

勢(その勢い)は山川の開破する(が崩れたりするようで)ごとく、制止す(止めることができない)べからず(ことができなかった)。

・瞬息(瞬く)の間、波は坐下に(に)及ぶ(杜子春の膝元迫ってくるが)も、子春は端坐して顧み(きちんと座っ気にかけもしなかった)ず。

言うことには（が）　こ　は　すでに（すでに）　かけられている（かけられている）

・将軍曰はく、「此の賊妖術　已に　成れ　り。」と。（杜子春のこと）

長く　この世　生かしておくことができない

・久しくは世間に在ら　しむ　べから　ず。」と。

側近に（側近に）　命じ（命じ）　杜子春（杜子春）　せた（せた）

・左右に勅して之を斬らしむ。

杜子春を（杜子春を）　終わると（終わると）　杜子春の（杜子春の）　は　連れていか（連れていか）

・斬り訖はり、魂魄　領かれ　て閻羅王に見ゆ。　謁見した

閻羅王が（閻羅王が）　言うことには（言うことには）　これ（これ）　は　なんとまあ（なんとまあ）

・曰はく、「此れ　乃ち　雲台峰の妖民か。・捉へ　て獄中に付せよ。」と。　化け物（化け物）　つかまえ（つかまえ）　預け（預け）

そこで（そこで）

・是　に　于い　て　鎔銅・　鉄杖、碓擣・磑磨、　火坑・

杜子春は（杜子春は）　に入れられ（に入れられ）　で打たれ（で打たれ）　臼でつかれ（臼でつかれ）　臼でひかれ（臼でひかれ）　火の穴（火の穴）　に入れられ（に入れられ）

煮えたぎった釜（煮えたぎった釜）

瓱湯

刀の山（刀の山）　剣の林（剣の林）　に入れられ（に入れられ）　を歩かされる（を歩かされる）　は（は）

、刀山・剣樹　の苦しみ、備さに　嘗め　ざる　は無し。　全て（全て）　経験しなかったもの（経験しなかったもの）　無い（無い）

しかし（しかし）

言葉（言葉）　思っているので（思っているので）

・然れども心に道士の言を念へ　ば、

やはり（やはり）　何とか我慢することができ（何とか我慢することができ）　ついに（ついに）　呻くことはなかった（呻くことはなかった）

亦　忍ぶ　べき　に　似、　竟に　呻吟せ　ず。

・数年、恩情（夫婦の情愛間）は甚だ（とても）篤（深かった）し。

・一（杜子春は人の）男を生み、僅かに二歳にして、聡慧（聡明さ）は敵ふ無し。（子はいなかった）

・盧（夫の）は児を抱き之と言ふも、応へず。（杜子春に何か話しかけるが）（杜子春は応えなかった）

・多方（盧はいろいろな方法で）之（妻の気）を引くも、終に辞（言葉）無し。（が）

・盧大いに怒りて曰はく、「昔賈大夫の妻其の夫を鄙しみて、（は）（とても）（怒っ）（言うことには）（その国の官僚）（は）（そ）（軽蔑し）

繞かも（少しも）笑（笑わ）はず（なかった）。

・然れども（しかしながら）其（夫）の雉を射るを観て、尚ほ（その上にそ）其の憾（軽蔑心）みを釈け（ゆるめた）り。

・今吾（私）は陋（身分が低く）にして賈（大夫）に及ばざれ（ない）ども（けれども）、

而も（しかし）文芸（学問）は徒だ（ただ）に雉を射るのみ（だけ）に非ざる（のものではなく）なり（もっと上等なものである）。

・而も（それでも）竟（未だに）に言はず（ものを言わない）。

【逆接】

・大丈夫（立派な男）妻の鄙しむ（軽蔑される）所と為らば（のであれば）、

安くん（どうして）ぞ其の子（その男）を用ゐん（が必要だろうか）。」と（いや、必要ではない）。

・乃ち(そこで)両足を持ち、頭を以つて(盧は子の)石上に撲つ(叩きつけた)。

51 手に応じて(手で打ち付けると)(頭は)砕け、血濺ぐこと(が)数歩(が)。(分の距離だった)

【応】……受けとめて反応を表す。

52 子春は愛心に生じ、忽ち(たちまち)其の約(そ約束)を忘れ、

覚えず(が)して声を失して(抑えきれずに)云ふ(言った)、「噫(ああ)。」と。

失言

53 噫の声未だ息まざるに、身は故の処に坐す。(終わらない)(うち)(杜子春の)(体)(もと)(所)(座っていた)

54 道士は亦(また)(杜子春)其の前に在(いた)り。

55 初めて(午前4時頃になったばかりだった)五更なり。

56 其の(さこほど)紫焔の(炉の)屋上を穿ち(突き破り)、大火起こりて(が)四合し(四方を取り囲み)、

屋室(屋根や部屋)俱に(全て)焚くるを(が)(焼けるの)見る(見た)。

57 道士歎じて(が)曰はく(言うことには)、「措大(なんとまあこんなふうに)余(私)を悞つこと(しくじらせた)乃ち是くのごとし。」と。

58 因りて(そこで)其の髪を提げて(杜子春)(つかん)水甕の中に(で)(水がめ)投ず(投げ入れた)。

火を消した？

59 未だ頃(間もなく)ならずして、火は息む(消えた)。

60 道士前みて(進んで)曰はく(言うことには)、「吾子の心(は)、喜怒哀懼悪慾、

(は杜子春の方に)

喜び・怒り・哀しみ・恐れ・憎しみ・欲望については、

皆(すべて忘れ去った)　忘れ(　)たり。61未だ(まだ)　臻らざる(そこまで至らなかった)　所(こと)の　者は、愛のみ(だけだ)。

62向に(先ほど)　子(お前)を(が)　して(「ああ」という)　噫の声(が)　無からしめば(出なかったならば)、吾(私)の薬は成り(完成し)、

子も(おまえ)　亦(また)　上仙す(仙人になる)。

63嗟乎(ああ)、仙才の(人能)　得難き(は得がたい)　なり(のだなあ)。64吾(私)が(の)　薬は重ねて(再び)　錬る(練り直す)　べし(ことができる)。

64而れども(しかし)　子の(おまえ)　身(体)は猶ほ(やはり)　世界(俗世間)の(に)　容るる(収容される)　所と(　)　為る(　)。

65之を(一生懸命やりなさい)　勉めよ(　)　や(　)。」と。66遥かに(遥かな)　路を指して(道士は)　帰らしむ(杜子春をせた)。